

《研究ノート》

音楽との学問的対話

薛 羅 軍

「音楽との学問的対話」は私が2001年から日本の大学で担当している授業科目である。この科目では一貫して様々な録画資料を用いて授業を行ってきた。本論文は、この授業を通して数年来考えてきたことの報告である。音楽と歴史学——音楽活動中の文化、音楽は世界の共通語か——音楽と言語、民族音楽学と「真・善・美」、音楽文化の多様性について論じている。文化の研究は近年盛んである。その中で音楽研究は欠かすことができない。文化には様々な形があり、そして音楽にもいろいろな形が存在している。宗教儀式時、子供が成人する通過儀礼の時などにも音楽活動があり、現在はそれらを総合的に研究しなければならない。これは私数年前から提唱した事であると同時に、日本には以前からその様な研究活動が行われてきた。

キーワード：音楽・民族・文化・学問・対話

はじめに

「音楽との学問的対話」は私が2001年から日本の大学で担当している授業科目である。この科目では一貫して様々な録画資料を用いて授業を行ってきた。本稿は、この授業を通して数年来考えてきたことの報告である。

現在社会ではいろいろ情報が簡単に手に入る。学生も自分の関心のある事について、沢山の情報に接している。現代の技術は発展も速く、社会情勢の変化もめまぐるしい。私の専門は民族音楽学で、まずフィールドワークを行わなければならない。その後論文を書き、またそれを講義でも展開する。そうした中にも、他の分野と同様やはり情報の処理、社会情勢の変化を取り入れ、総合的に物を考えて行かなければならない。

例えば音楽に関連する学問分野には歴史学・社会学・心理学・文化人類学・哲学・民族学・民俗学・宗教学・言語学など様々なものがあり、特に記録・伝達のメディアとの関連は無視できない。以下、分類して述べたい。

1 音楽と歴史学—音楽活動の中での文化—

私はフィールドワークを音楽の面を中心に行っている。中国の少数民族はほぼ文字を持っておらず、ほとんどの知識は歌の中に残っており、自分の民族の歴史も歌で歌われ口承される。侗（トン）族の人々は年末や正月には歌師を呼んで自分たちの歴史を歌ってもらう。この習慣は現在も続いている。侗族の人々は自らの歴史を大事にしており、まずは歴史歌覚えていなければ歌師とは言われない。

侗族は、長い間にわたって文字を持たなかったので、侗族文化芸術の蓄積と伝承は、その大部分を口頭による蓄積と伝達に頼ってきた。侗族琵琶歌が、この点に関して働く機能はもっとも大きい。これは、侗族琵琶歌の流布においても見出すことができる。侗族琵琶歌の『秀銀と吉妹』は、清代の呉朝堂（約1820年－1890年）の作であるが、今日でもなお伝承され続けている。作品は、周秀銀と崔吉妹という青年男女の恋人同士が、封建的な婚姻制度の圧迫を受けて情死した悲劇である。また『娘梅歌』は、封建社会の迫害に、勇敢にも立ち向かう典型的な女性像を生み出した。この女性秦娘梅は、“女還舅門”から解放されるため従姉妹の言い付けで従兄弟に嫁がなければならないという封建的な婚礼制度の圧迫のもとで、毅然として恋人である楊助郎と遠方へ逃走したのである。侗族琵琶歌は数千行にも及び幾晩も歌ってやっと歌い終わる。その物語のストーリーは完成度が高く、物語るように歌を詠み、抒情的且つ論理的で文学の高みに至るその水準は極めて高い。侗族琵琶歌という芸術形式をもって、侗族人民はその豊富な文化遺産を蓄積してきたと言えよう。

侗族地域では民歌の口承が広く行われている。文字のなかった時代には、民歌は伝統的な文化を記憶し、保存する働きをしていた。後になって、漢字は音声記号として琵琶歌を記録し、保存するため使われるようになった。しかし、統一された漢字の使い方はなく、それを書いた人以外はほとんど判読できないものであった。漢字を音声記号として使用することによって、琵琶歌の保存方法は部分的に口承から文字に変わったが、辺鄙な田舎では、人々はみな隣り合って住んでいるので、知識や文化の伝授においては、依然として口承形式を好むのである。これは文字を知る人が少ないということにもよる。口承の侗族琵琶歌は外来語に頼ることが少なく、侗族人の生活を自然に表現できるので、教育と娯楽という両方の働きをしてきた。侗族の人にとっては親しみやすい文芸形式の一つである。内容がすでに時代遅れになっている琵琶歌も存在するが、上述の社会環境と生活様式がほとんど変わっていないため、口承の方法は伝統文化の伝承ばかりではなく、

新しい生活の描写及び政府政策の伝達や科学技術の普及にも、大きな役割を果たしている。侗族琵琶歌はこれからもこのような機能を持ち続けるであろう。

侗族琵琶歌は侗族の民間音楽文化の全体においてとりわけ社会性を持っているほうである。今のところ、琵琶歌の伝承は依然地元の歌手によるところが大きいと思う。なぜかというと、歌い手は民間の智慧の化身だからである。侗族地域では歌を教え、伝えるのは昔からの習慣である。普通では、幼少時代は父母から、少年時代は年上の若い人たちから、青年の時は歌手、歌師から歌を学ぶ。普虹氏の『貴州民族音楽文集』によると、榕江県七十二寨の有名な歌師固利氏が青年時代にまず地元の歌師から歌を学び、地元の歌をほとんど身につけた後、彼は農閑期を利用して、100キロ以上も離れた黎平へ行って、別の歌師から歌を学んだという。昼間はその歌師と一緒に野良仕事をし、夜は歌師に歌を教わる。固利氏が出世したあと、沢山の若者がまた彼の門人となった。侗族には昔から歌師を尊敬する伝統がある。歌師が外の村へ出掛けて歌を教える時も報酬を受け取らない（現地では報酬を支払う習慣がない）。生徒の家へ順番に行ってご馳走になるだけである。歌師が家へ帰る時、その村の娘さんたちが靴の中敷きや花の刺繍のついたベルトなどを、村の老人たちがお酒、肉などを歌師に贈る。それに村の若者が歌師を家まで送る。歌師は全ての人から尊敬されるので、若い人たちも歌師になれるように努力するのである。

しかし現在「歌師」を自称する30代のきれいな女性たちがテレビなどのメディアに登場しているが、残念ながらそれは観光客目当てのタレント的なものと言わざるを得ない。自分の歴史を歌で歌う少数民族や原住民族は他にもある。国立民族学博物館の江口一久教授が『北部カメルーン・フルベ族の民間説話集 V』を編集した際は、特に民話を中心として記録を行い、私も採譜に協力した。音楽はそれほど複雑ではない。比較的単純なメロディーが、何度も繰り返し使われ、むしろ歌詞を重視しているものであった。何故歌で歴史を歌うのか。それはおそらく口に馴染み、覚えやすいからであろう。もし単に朗読で覚えるとすればどうしても文字の記録が必要である。歌には実際ほとんど文字の記録がない。自分の「歌師」から口伝で伝承した歌詞をそのまま覚えることは、彼らの間で当然のように行われている。文字を持たない社会では、歌のレパートリーが多く、しかも長編の歴史歌をそらんじている者は尊敬を集め、人気も博す。さらにその他のいろいろなことにも能力を発揮する。学者がこの歴史歌を聴いて、これを文学作品とみなしたほどである。その民族の人々はこの歌を聞いて、祖先や神様から力を授けられると考える。このことは私もフィールドワークで何度も耳にした。歌師が歴史歌を歌い、周

りの人々もこれを厳粛に聴き、子供たちも静かに聴き、歌師が歌い終わるまでただおとなしく座っている。聴き終わってから皆で一団となって行事を行う。例えば狩猟に出発する前の山の神への祈りや、新しい家を建てる前の先祖への報告など、すべてこのように行われる。

他の例としては、20世紀に入って1940年代に中国雲南省碧江県において怒(ヌ)族と傈僳(リス)族がある狩猟地の所有権をめぐる争い、その後双方が大勢で武器や凶器を持ちだしての紛争に発展した。その後も双方が自分の領有を主張して譲らず、長い論争にも結果が出ない。ついに怒(ヌ)族の長老兼歌師が祖先神話を歌った。それは64代前の祖先の事までさかのぼって歌うものであった。傈僳(リス)族の長老兼歌師が歌ったのは30代の前の祖先の事までであった。結局傈僳(リス)族の人々の負けとなり、その狩猟地から離脱した。もちろんこれは現在の人々から我々が聞き取った話にしか過ぎないが、それでもそれは彼らの音楽の中の文化というものを示しているとは言えないだろうか。また、歴史歌は文学研究のみならず、歴史研究にも大きな価値がある。このような物語は他の少数民族にもある。歌師は無文字社会には大きな役割を持っている。つまり、歌は無文字社会における生活の智慧なのである。

2 音楽は世界の共通語か—音楽と言語—

「音楽」は世界の共通語だとしばしば語られる。私は初回の授業の際、毎回このことを学生に質問する。ほとんどの学生はこれに賛成して、音楽は世界の共通語だと答える。ただし、民族音楽学者としてはこのこと認められない。なぜなら、例えば私が中国少数民族の音楽を学生に聴かせ、さらに「この音楽は好きですか」と尋ねると、その答えはほぼすべて、好きではないからなのである。私は以前よくフィールドワークの際、民間の歌手たちに録音した古典音楽を聴かせて、その感想を聞く。すると、彼らは初めは遠慮して、きれいな歌ですと答える。しかしだんだんとその歌手と仲良くなって、特に一緒にお酒を飲んだ後で、もう一度歌手に質問すると、今度は口を揃えて「あれはあなたたちの音楽ですよ、私たちは分かりません」と答えるのである。いろいろな音楽と言葉の関係は現在音楽学においても未解決の問題である。もし「音楽は世界の共通語」と言うならば、そこには一定の条件を付けなければならない。古典音楽はすべての人が好きとは限らない。子供の頃に一定の影響を受け、また成人するまで一定の教育を受けて初めて古典音楽が理解できるのかも知れない。

あるとき私はひとりの有名な尺八奏者志村哲氏と話をした。彼はよく小学生に尺八を紹介に行く。彼にはたくさんの弟子もいる。それなのになぜ必ず自分で行かなければならないのか、小学生相手なのだから弟子に行かせれば十分でしょうと私が尋ねると、彼の答はこうであった。「違います、小学生には必ず最高の尺八を味わわせます。子供の頃から一番良い物を聴かせていけば、将来の趣味になるかも知れないし、これからの尺八の後継者になるかもしれない。下手な尺八の音を聴いて尺八が嫌いになるかもしれないし、一生尺八や音楽から遠ざかるかも知れない」と。この例は子供の頃に味わったものは一生消えない、ということを示している。

少数民族の例に戻ると、砂漠で放牧する男性が非常に単純な、まるで動物の鳴き声のような歌を歌っている映像がある。何も説明せずに学生たちに聴かせると、ほぼ全員「喧嘩している」と言う。しかし実は、彼は恋人を想って歌っているのである。しかもそれは放牧の時である。自分の気持ちだけで歌い、それを聴いているのも自分自身だけなのである。

言葉と音楽の関係は大変密接であり、歌詞の意味が分からないと音楽として十分に理解できない。中国の55の少数民族には文字持たない民族が多い。音楽を聴くだけで意味が通じる事は珍しい。一方、口琴（日本にも口琴協会もある）は多くの少数民族で使用されているが、雲南の傣族（リス）族の人々は口琴の音楽を聞いてその意味が分かる。外部の人々にはただの口琴の音に過ぎないが、傣族（リス）族の人々はその内容も知っているのである。これは音楽と言語とが単純に分離できないことを示す例でもある。

3 民族音楽学と「真・善・美」

音楽哲学という学問がある。私はその専門家ではなく、民族音楽学を専門にしている。今回は「民族音楽学」と「真・善・美」に関して少し論じたい。

「真・善・美」はおそらく子供のころから親や親戚や先生から教育を受けて身につくものである。民族音楽学は「真」のみを求めている。世界の音楽文化の「いつ、どこで、だれが、なにを」をそのまま記録するのが、民族音楽学の仕事である。

「善」や「美」は時代によって変わるし、現在の若者にはいろいろなファッションがあり、茶髪や金髪もよく見られる。また時には年配の人にも茶髪や金髪、さらには他の色に染めている人もいる。現代社会ではこうしたことは自由である。私がある大学で教えた学生は実に自由奔放な性格で、大学2年生の時の最初の授業の時から髪形がしばしば

変わっている。また服装も大変華やかで、毎回異なっている。彼女のそのような様子に私も慣れてしまっていた。一年後のある日教室へ向かっていると、一人の真面目そうなスーツ姿の女性が私を待っている。誰だったかと自問しつつ、おそらく人違いだろうと彼女を避けて通りすぎようとする、その女性は私に声を掛けてきた。「先生、今日は会社の面接がありますので、授業を欠席させていただきたいです」。私は驚いて、「すみませんが、どちら様でしょうか」と尋ねた。彼女は微笑で名前を告げた。私は以前と全く違う様子に更に驚いた。今の格好は一般的な社会人である。以前の格好は自分の好きな格好である。やはり「就職活動」で一般の社会人になったのであろう。もし以前のまま面接に行ければおそらくどこの会社も採用しない。以前の「美」は自分の好きな「美」であり、そこにもそれなりのルールがある。昔のテレビ番組や古い写真などを見ても、その時代独特の物が多い。その時代の「美」が残っている。つまり、「美」とは変化する物なのである。

「善」と「美」はいずれも個人の意識や感じ方であり、映画や小説などにもよく出てくる。ある人は家では良い父親、良い夫だが、外では悪い事をする。それは場所や人によって「善」が変わるのである。「早く死んでね」。この言葉は決してよくない言葉である。ところがこれはあるアメリカ映画の、妻が夫にかけた最後の言葉である。夫は張り付けの刑を受け、妻がそれを見て、夫の苦痛が早く終わるよう願ったセリフであり、これは「善」の表現である。「善」にも場所や状況によって変わる。

では「真」はどうだろう。最も簡単だとも言え、最も難しいとも言える。そのまま記録し、真実を伝えればよい。民族音楽学は「真」（真実の事柄）を求めている。しかし「真」は本当に伝えることができるのだろうか。多くの人がそのように問うだろう。確かにそれほど簡単ではない。記録者にこの意識があるならば、真実の最大の記録が可能となるだろう。

この世に変わらない物はない。言葉や服装もたちまち変わっていく。その場の状況により容易に変化する。もちろん音楽も変わるが、しかしそれは変化が最も遅い物ではなかろうか。民間音楽初めは自分のために歌う。他人を喜ばせるためではない。それは「自楽」であり、歌の上手下手も関係ない。自分の気持ちだけを歌っていればよい。現在カラオケが流行しており、そこに行けば楽しく歌え、ストレスも発散できる。もしコンサートを開きたいならば、聴衆の前では必ず上手に歌わなければならない。そうでなければ誰も入場券を買わない。人々の前で歌うことは許されない。つまり、それは「他楽」である。

村々にフィールドワークに行くと、歌手たちの歌を聴く。歴史の歌を聞いた後で歌手にインタビューすると、時々歌手自身が自分で何を歌っているかが分からない、と答えることがある。先祖代々伝わったものだという答えも少なくない。その歌詞の内容が解明できるならば、大きな歴史的価値がある。

繰り返すが、音楽は最初は他人の楽しみのための物ではない。まず自分が喜んで歌う物である。すべてが移り変わるその中で、音楽は変化が最も遅いと考えられる。なぜなら、音楽は自分の楽しみのために歌う物で、他人との交流ではないので、変わる必要がない。そして自分の気持ちを表現する。覚えやすいし、覚えたら忘れにくい。私も何度も経験したことであるが、歌手に歌詞だけ覚えるように頼んでも、なかなか上手くできない。しかし歌として覚えてもらおうと、歌詞も含めて全て覚えられるものである。

私は一度、侗（トン）族の葬式に偶然に参列した。フィールドワーク中最も難しいのは、葬式の参列である。「いつ、どこで、だれが」の情報を得るのが困難だからである。1997年、貴州省侗（トン）族地域のフィールドワークに際して、実に偶然にその機会を得た。その地域の習慣で、葬式の時には参列者は漬物の様な魚を食べる。私もその魚を食べた。その時、地元の人々は自慢げに教えてくれた。「この魚は50年前に作っていた」「100年前よ」と。そのまま信じるわけではないが、いろいろ話をした後、50年前の物である可能性もあると感じた。なぜなら、亡くなったのは70代の女性で、その地域では結婚の時、自分の葬式の漬物魚を作る習慣があり、その女性は10代後半の16歳前後に結婚している。亡くなった婦人が17歳で結婚したとすれば、その漬物魚は50年ほど経っている計算になる。

余談だが、もう一つ触れておかねばならないのは、歌手の年齢の記録である。やはり生年月日の記録はどうしても必要である。いろいろ資料を読んでいると、歌手は「青年歌手」「中年歌手」「老年歌手」と書いてあることがしばしばある。しかしそれでは不十分である。私が資料上の「青年歌手」を訪ねた時、目の前に現れたのは「青年」ではなかった。「中年」か、それとも「中年」以上かもしれない。生年月日を記録してあれば、その歌手の年齢はすぐに分かる。

4 音楽文化の多様性

世界の音楽文化は多様であり、音楽文化は周囲から様々な影響を受ける。国によっては類似した音楽文化を持っているように見えても、しかしそこにはやはり独自の音楽文

化がある。様々な異文化が同時に存在している世界では、音楽文化も豊富である。この認識は民族音楽学者が普遍的に持っている認識である。

自分自身の音楽の定義もあろう。それはその人自身の経歴や教育歴から生まれたものである。しかし一方、あらゆる音楽文化の多様性を認めない限り、研究や伝達もできないと思う。

アフリカの民間音楽を聴いて、多くの学生から様々な感想を聞いた。一人の学生はこのように言う。「それは何の音楽か分からない。伝えたいことがない。ただ人の耳に不快感のない、あまり独自性のない音や旋律をだらだらと流し続けているだけで、無意味なものが多い気がします。商売道具のようになりつつあることがとても悲しいです。何の感動もなく、一時は全ての音楽を聞きたくなくなった程、激しい嫌悪感を覚えました」と。

そのような感想を学生が持つに至った理由はどこにあるのだろうか。私は、この学生は自分の「音楽感」を明確に持っていたが、残念なことに、その音楽の背景が分かっていたためであると思う。既に述べたように、音楽と言語には密接な関係がある。言語もその文化の基本である。まずはその歌詞を理解して、また歌の背景も理解して、さらに異文化の中の音楽がその文化の中でどんな役割をしているかを、自分の意識だけではなく、その習慣や文化を通じて理解しなければ、その音楽も受け入れられない。

文化の研究は近年盛んである。その中で音楽研究は欠かすことができない。文化には様々な形があり、そして音楽にもいろいろな形が存在している。宗教儀式時、子供が成人する通過儀礼の時などにも音楽活動があり、現在はそれらを総合的に研究しなければならない。このことは私の数年前から提唱してきた事であると同時に日本では1945年から九学会連合会の研究活動もある。

参考文献

- 九学会連合奄美調査委員会（1982）『奄美——自然・文化・社会』弘文堂。
薛羅軍（2005）『侗族の音楽が語る文化の静態と動態』大学教育出版。
薛羅軍（2007）「文化の中の音楽・音楽の中の文化—中国の少数民族チャン（羌）族のフィールドワークを通して—」『文化科学研究』第19巻第1号（通巻37号）中京大学文化科学研究所，pp55-70。
陳澄巧（2006）『文化研究』台北城邦文化事業股份有限公司出版。